

0. 序

本稿では Goldberg (1995) の構文理論 (Construction Grammar) によって、スペイン語 EN の否定を説明することを目的とする。従来の研究では、EN の否定は主題化やイディオムといった観点から議論されてきたが¹、本稿では概念構造を用いて意味論的な視野から分析する。本稿における「EN の否定」とは、以下の例文における否定表現を指す。

- (1) a. En toda la tarde agarró una rata.
b. En tu vida has trabajado, Pedro.

Jacques (1999)

(1) では否定辞 (palabras negativas) が現れていないが、意味的に否定極性 (polaridad negativa) を持つ。本稿では特に明記しない限り、EN の否定を「EN を伴う前置詞句の存在によって、否定辞が現れずに否定極性を持ちうる命題表現」と定義する。

1. 先行研究

本節では Bosque (1980)、Sanchez Lopez (1999)、及び Jacques (1999) を先行研究と位置づけ、諸々の問題点を指摘しながら EN の否定を概観する。

1.1 Bosque (1980) による EN の否定の扱い

Bosque (1980 : 29-64) は、EN の否定を主題化 (Tematización) 及び NEG-削除 (Elisión de NEG) の観点から説明している²。

- (2) a. No vino nadie.
b. Nadie vino.

Bosque (1980 : 29)

¹ Bosque (1980, 1999) 他を参照。

² 山田 (1995 : 218, 551) も主題化の観点から EN の否定を説明している。

(2a) と (2b) は、後者が強調の意味を含意するという点では異なるが、真理値は同一である。また、否定の呼応 (concordancia negativa) の観点から、(3a) が非文である事も同様に妥当性を持つ。

- (3) a. *No vino alguien.
b. No vino nadie.= (2a)

Bosque (1980 : 29)

EN を含んだ否定表現に関して以下の例文を参照する。

- (4) a. Tal actitud no se puede tolerar en modo alguno.
b. No he estado aquí en mi/la/ vida.
c. No lo he visto en todo el día.
- (5) a. En modo alguno se puede tolerar tal actitud.
b. En mi/la/ vida he estado aquí.
c. En todo el día lo he visto.

Bosque (1980 : 34)

(4) と (5) の意味論的真理値は同一であり、それぞれ平行な関係を示す。Bosque (1980) は、(5) が否定極性を持つのは前置詞句の移動、即ち主題化に因り、(5) において (4) のように否定辞が表層に現れないのは、NEG-削除に因ると説明している。これはチョムスキー付加 (Chomsky-adjunction) 及び NEG-削除によって以下のように定式化される。

<i>Tematización de TPN (T-TPN)</i>						
X-NEG		[V-Y-TPN-W]				- Z
1	2	3	4	5	6	7
1	5+2	3	4	∅	6	7

Bosque (1980 : 34)

しかしこの定式で否定極性が必ず付加されるとは限らない。(6a) と (6b) はと

もに曖昧である。

(6) a. En mi vida he sido vendedor de libros.

b. En toda la tarde has tenido tiempo de ir a la tienda.

Bosque (1980 : 34)

(6a) と (6b) は肯定と否定の二通りの解釈が与えられる。Bosque はこの曖昧性の根拠について説明していない。

本稿では原則的に、主題化、呼応及び NEG-削除によって、否定辞を含んだ否定表現は妥当性を持つとする Bosque の主張を支持する。しかし、(1) 元来全く否定の要素を持ち得ない前置詞 EN を *tampoco*、*nadie*、*sin* といった否定辞と同等に扱っている、(2) EN 前置詞句を主題化すると何故否定極性が加わるのかといった理由付けを説明していない、(3) 統語論的側面のみを重視し、意味論的側面における分析が欠如している、(4) NEG-削除が如何なる理由で成されるのかといった動機付けが明確ではない、といった点が欠点として挙げられよう。

1.2 Sanchez Lopez (1999) による EN の否定の扱い

Sanchez Lopez (1999) は、EN の否定をイディオムの点から説明する。

(7) En la vida adivinarás el acertijo.

Sanchez Lopez (1999 : 2564)

Sanchez Lopez は、(7) において *En la vida* という前置詞句が単独で命題に否定極性を与えると主張する。即ち、*En la vida* という複合語は完全に語彙化し、否定辞と同等の極性決定機能を持つとしている。更に、一般化された EN を伴う前置詞句は否定辞と同等にふるまうとして、否定極性の誘引子 (*inductores de polaridad negativa*) に呼応すると説明する。

(8) Ana es la mejor persona que he conocido en mi vida.

Sanchez Lopez (1999 : 2565)

Sanchez Lopez によれば、否定極性の誘引子である *mejor* が *en mi vida* と呼

応し、結果として (8) は否定極性を持つ³。

(8) は、Bosque (1980) の主題化による否定極性付与の反例として示唆的であり、語彙化の説明に妥当性を与える。だが、en mi vida を語彙化された否定表現と位置づける Sanchez の主張には無理がある。EN の否定が全て EN を伴う前置詞句の語彙化に因るならば、en la vida、en mi vida、en tu vida、en toda la tarde といったほぼ無数の EN を伴う前置詞句ごとに語彙化の説明を与えねばならない。また、EN 前置詞句を持ちながら、肯定的にしか解釈されえない (9) のような現象を説明できない。

(9) En tu vida has trabajado mucho.

(9) は、前置詞句を主題化しながらも否定極性を持たないという点で Bosque (1980) の反例になりうるし、また、EN 前置詞句が現れながらも肯定的な読みしかできないという点で Sanchez Lopez の語彙化の反例になりうる。更に語彙化では、そもそも (10) のような基本的な EN 前置詞句が否定極性を持たないことを説明できない。

(10) a. Comeré la cena en una fabrica.

b. Vivo en una casita.

c. Tienes que prepararlo en cinco minutos.

(10a) は動的な動詞を伴う空間表現、(10b) は静的な動詞を伴う空間表現⁴、(10c) は空間表現を時間表現にメタファー的に拡張した表現⁵であるが、いずれも肯定的解釈しか持たない⁶。

1.3 Jacques (1999) による EN の否定の扱い

Jacques (1999) は、EN の否定現象を以下のように説明する。

³ (8) の極性解釈は個人によって判断が揺れるので曖昧とした方が正確である。

⁴ 動詞のダイナミクスに関しては Vendler (1967)、影山 (1996) 他を参照。

⁵ Lakoff & Johnson (1980) 及び Lakoff (1987) を参照。

⁶ (10) が示すように、動詞の意味成分によって EN を伴った表現における極性変化の可能性は否定されうる。

(11) Una combinación del tipo < en (+ todo) + sustantivo que indica un lapso de tiempo (año, día, mañana, noche, vida...) > siempre indica negación.

Jacques (1999 : 671)

Jacques は続けて、これら EN 前置詞句は動詞の前におかれる傾向にあり、(nada 等の否定辞と同じように) 不変化辞 no を用いないと主張する。しかし、この論は (6) のように常に否定を表現するわけではなく極性が曖昧な例、(8) のように EN 前置詞句が動詞の後に来ても否定を表す例、また、(9) のように EN 前置詞句が動詞の前に来ながら肯定的解釈を得られる例というように諸々の反証が可能である。

修正案として、Tabayashi (2003) 及び田林 (2003) は以下の提案をする。

(12) La preposición EN percebida por Gestalt tendrá potencialmente la propiedad NEG por el cambio de la proposición el prototipo.

Tabayashi (2003 : 79)

EN が否定素性を潜在的に持ちうるという (12) の意見を支える言語表現として、田林 (2003) は以下の例を挙げる。

(13) a. ¿Hoy mataste el tiempo durante el trabajo? – En absolute.

b. ¿Hoy mataste el tiempo durante el trabajo? – Absolutamente.

田林 (2003 : 56)

(13b) が肯定的に解釈される (仕事をさぼった) のに対し、(13a) で否定的な解釈 (仕事をさぼっていない) がされるのは EN が否定素性を潜在的に持ちうるからと説明される。

(14) a. En tu vida has trabajado mucho. (= (9))

b. En tu vida has trabajado.

田林 (2003 : 52)

Tabayashi では (14b) が否定的に解釈されるのは、主題化や EN 前置詞句の性質ではなくコンテキストに由来すると説明される。しかし、コンテキストの定

義自体が言及されておらずブラックボックス的な扱いを受けているため、文脈がどこまで極性に影響を与えうるか、更にプロトタイプ命題に否定極性がかけられるのは統語のレベルか語彙のレベルか等は議論すべき課題である⁷。

本稿ではコンテキストによる否定極性という語用論的な観点を捨て、意味論的概念構造から EN の否定を分析する。

2. 本論

前節では EN の否定研究で諸々の問題点があることを見た。本節では EN の否定が現れうる条件を提案する。

2.1 EN の否定における統語的提案

本節では EN の否定が現れうる統語的条件を以下のように提案する。

(15) EN の否定における統語的条件 (Condiciones Sintácticas de la Negación de EN)

- i) 動詞の意味を修飾する選択的前置詞句または副詞があってはならない。
- ii) EN 前置詞句は主に時間経過を指し示す語句と結合しなければならない。
- iii) EN 前置詞句は主題化されなければならない。

上記の条件は先行研究の融合であり、融合された条件内容はそれぞれ ii) は Jacques (1999)、iii) は Bosque (1980) に準拠する。(15) の妥当性を検討するために、(16) 及び (17) を検証する。

(16) En tu vida has trabajado. (= (14b))

(17) a. En tu vida has trabajado mucho. (= (9))

b. En una fabrica has trabajado.

c. Has trabajado en tu vida.

(16) は否定解釈、(17) は肯定解釈がなされる文である。まず、(16) は (15) を全て満たすため、否定的解釈がなされる。(17a) は mucho が動詞 has trabajado を意味的に修飾しているため、(15 i) に違反する。従って否定解釈はなされな

⁷ プロトタイプ命題の詳しい議論は Tabayashi (2003) を参照。

い。(15 i) の条件を支持するのが (18) である。(18) も同様に否定解釈はなされない。

(18) En mi vida poco a poco he comprendido lo que me dijo mi padre.

(18) では、poco a poco が動詞 he comprendido の意味を修飾していることにより、肯定解釈しか許さない。

(17b) は (15 i) 及び (15 iii) は満たすが、(15 ii) の条件に抵触するため、否定解釈はなされない。同様に (17c) は (15 i) 及び (15 ii) は満たすが、(15 iii) の条件に抵触し、否定解釈は不可能である。

(5b) に現れる aquí は近称の指示副詞と考えられるが、この指示副詞は動詞 he estado が義務的に要求する。従って、動詞から与えられる参加者役割とみなされるため (15 i) には抵触せず、否定解釈が可能である⁸。

以下、(15) の要件を満たす EN 前置詞句を伴う表現が否定的解釈、要件を満たさない表現が肯定的解釈をする例を挙げる。なお、否定辞を伴った例文も参考までに列挙する。否定時を伴った表現は EN 前置詞句が主題化されないことに注目されたい。

⁸ (15) の反例と思われるものに以下の例文がある。

(i) a. En parte alguna se le puede encontrar.

b. En alguna parte se le puede encontrar.

(i a) は否定解釈、(i b) は肯定解釈を取るが、これは EN の否定というより alguna の否定辞的振る舞いの影響の方が強いと思われる。即ち、(i a) の否定極性は EN 前置詞句から生じたものではなく、alguna の語彙的特性ないしは統語的特性と考えられる。((4a) 及び (5a) 参照)。以下を参照されたい。

(ii) a. De ningún modo.

b. *De modo alguno.

(iii) a. *En ningún modo.

b. En modo alguno.

Bosque (1980: 64)

Bosque (1980) は、(ii) 及び (iii) の相違が modo に因るとしているが、むしろ alguno と ningún の語彙的意味の相違に因るものと考えらるべきであろう。これらは語彙における否定の転換であり、本論では扱わないが、興味ある問題である。

<肯定の例文：(15) の条件に違反する場合>

1. ¿Cuántos pájaros has matado en tu vida, Justina? (Pedro páramo)
2. Juanito iba penetrando lentamente en la vida de la joven,...(Arroz y Tartana)
3. Otro hecho notable en la vida de Galo es el haber repudiado a... (Crítica literaria)
4. (En rituales) en la resurrección de la carne y en la vida perdurable, amén. (La Gaviota)

<否定の例文：(15) の条件を満たす場合ないしは否定辞を伴う場合>

1. Ni en mi vida le caté a ninguno; (Don Quijote de la Mancha)
2. Que no los he visto en mi vida, como vos los habréis visto, como...
3. Pero si yo le hiciere ni le probare más en mi vida, aquí sea mi hora.
4. En mi vida le he hablado palabra, y, con todo eso, le quiero...
5. Porque en mi vida he visto ni oído cosa más propia.
6. En verdad, señora respondió Sancho, que en mi vida he bebido de malicia;
7. Osaré jurar a Vuestra Excelencia que en mi vida he subido sobre bestia más reposada ni...
8. Pues ni yo la enamoré ni la desdeñé en mi vida.
9. Jamás se podrá ver ni habrá visto en toda la vida, aunque no esperaba yo...
10. Pues ándense a eso, y no acabaremos en toda la vida.
11. ¡Ah! No lo olvidaré en mi vida. (La Gaviota)
12. -¡Dios mío!- decía el hermano Gabriel-, en mi vida he visto tantas telarañas.
13. Pero eso de renegar de su padre, en mi vida he oído otra.
14. No lo he encontrado ni conocido en la vida de Dios. Y se puso a cantar:
15. No me parece sino que ni en el mundo ni en la vida de Dios hay de quién echar mano sino de mí.
16. ¿cómo iba a dárselas yo? En la vida he aprendido que cuando te condenan a vivir... (La muchacha que pudo ser Emmanuelle)
17. que no os vi en mi vida. (La verdad sospechosa)

18. no vi mejor en mi vida.

19. En mi vida me ha valido...

(15) が正しいとすれば、(6) 及び (8) の極性解釈が曖昧な点は以下のように説明できる。

まず、(6a) において de libros は選択的であり、de libros がなくとも適格である (En mi vida he sido vendedor)。更に (6a) の曖昧性は de libros という前置詞句が動詞 (he sido) を修飾するか、名詞 (vendedor) を修飾するか、聞き手が一瞬判断に迷うために発生する。動詞を修飾した場合、(6a) は (15 i) に抵触し否定解釈を持ちえないが、名詞を修飾するならば (15 i) に抵触しないため、否定解釈を持ちうる。勿論 (6a) の de libros は名詞を修飾する読みしかないが、de libros の立ち位置が極性判断を曖昧にすると推測される (3.3 節参照)。(6b) の曖昧性も同様の理由による。

(8) の曖昧性は、(15 iii) に違反しながら、否定極性の誘引子 (mejor) が出現していることが原因と考えられる。

以上、統語論的知見から EN の否定条件を提示した⁹。次節では (15 i) に的

⁹ プロソディないしは語用論的要素を考慮に入れると (15) の妥当性が崩れることがある。

(i) En tu vida has trabajado tanto.

(i) は (15) に従えば肯定解釈を持つが、音調によって否定解釈を取ることもある。(ii) の大文字の部分は強勢が置かれたことを示す。

(ii) a. En tu vida has trabajado TANTO.

b. En tu VIDA has trabajado tanto.

(ii a) は (15) に従い肯定解釈を持つが、(ii b) は EN 前置詞句に直接かわる VIDA に強勢を置くことによって否定解釈を持ちうる。原因として、否定極性に直接かわる要素を強勢することにより、tanto の意味的役割が減じている可能性が考えられる。Jackendoff (1972) も参照。

語用論的な知見からは、(iii) 及び (iv) が否定解釈を持ちうる。

(iii) En toda la tarde he vendido un puto / mal libro como ayer.

(iv) En tu vida has trabajado tanto como hoy.

(iii) では、puto / mal が否定極性を誘発する誘因子の解釈が考えられるが、だからといって puto / mal を端的に否定の誘因子と決定することはできない。

(iv) は hoy との比較によって否定の解釈が容認されうる。対比的な肯定命題を常に背後に持つものが否定文であるとするならば、(iv) は否定文における前提の肯定命題が表現されているために否定と解釈されうる。従って、語用論的要因も EN の否定の分析には無視できない。加賀 (1997: 140) も参照。

を絞り、概念構造の点から何故 (15 i) が EN の否定条件となっているのかを考察する。

3. EN の否定における項構造

本節では EN の否定における概念構造を Goldberg (1995) の主張する構文文法 (Construction Grammar) で説明する。3.1 で構文文法を概略し、3.2 で構文文法を概念意味論的に図式する。新しい試みとして、3.3 で EN の否定における概念構造を分析し、3.4 では構文理論によって更なる説明を図る。

3.1 構文文法 (Goldberg, 1995)

構文文法 (Construction Grammar) とは、ある特定の意味と形式からなる構文の存在を容認する考え方で、Lakoff (1987) や Fillmore (1982) のフレーム意味論 (Frame Semantics) で既にその存在は指摘されている。構文理論の根底を支えるのは、中心的構文の中に非中心的構文の存在を認め、中心的構文と非中心的構文の「動機付けの関係」や、「特定の意味と形式から成る構文の存在」である¹⁰。それをより体系化したのが Goldberg (1995) である。

構文理論における主張はおおまかに言って、(1) 構文は特定の意味と形式からなり言語の基本的単位をなす、(2) 格文法によって説明される文法構造だけでなく、全ての構造をも包括する、(3) 語彙と統語も共に形式と意味が対になっており、その点で厳密な区別が出来ない¹¹、(4) 語用論的要因を考慮に入れる必要がある、と説明されよう。Goldberg の大きな功績の一つは、以上の主張に加え心理学的要因も積極的に取り入れたことで、意味役割と項の不一致を解決したことにある。意味役割と項の不一致の現象は二重目的語構文などが代表的であるが、本稿では使役移動構文 (cause-motion construction) に的を絞って概観する。使役移動構文とは、以下のような文である。

(19) Pat sneezed the foam off the cappuccino.

大堀 (2002)

(19) では動作主の意味役割を持つ Pat が主題の意味役割を持つ foam に使役

¹⁰ Lakoff (1987) は、there 構文によってこの重要性を示している。

¹¹ 影山 (1996) はこの区別立てが重要であると論じている。

的に働きかけ、前置詞句で示された経路を辿る運動を引き起こす。しかし、動詞 sneeze は一項を与える自動詞であり、foam 及び cappuccino には動詞から項が与えられない。構文理論では、これらは動詞からではなく構文から項を与えられ、それぞれの意味役割を担うとする立場を取る。つまり、(19) の項構造は動詞 sneeze という語彙項目によってもたらされたものではなく、使役移動構文という構文によってもたらされたものである。この構文も他の構文同様生産性が高く、単なる foam の具体的移動から抽象的移動にまでメタファー的に拡張できる (e.g. John allowed Mary out of the room)。

フレーム意味論では、動詞 sneeze が表す行為が「カプチーノから泡を飛ばす」という運動を使役的に引き起こしうるという知識を持っていると説明される。生成語彙論では、語彙項目の段階で既に動詞 sneeze には使役的な移動を引き起こしうるという情報があると仮定される。しかし、生成語彙論では動詞に付与される情報があまりに多すぎることで、フレーム意味論では語用論的及び心理的な要素が過大評価されていることから、構文理論における説明が最も妥当であると思われる。

(19) における格付与は、統語論のレベルでは cappuccino は前置詞 off から斜格を、Pat は動詞 sneeze から主格を付与されるが、foam は構文知識から目的格を付与されているとしか説明できない。生成語彙論では動詞 sneeze の情報が一定でないため格付与が限定されない。

(20) *Pat sneezed the foam.

大堀 (2002)

(20) の非文法性は、動詞 sneeze は foam に格を付与しないと説明できるが、この説明を推し進めると生成語彙論では (19) の文法性を説明できない。場合ごとに理想的な認知モデルを構築するフレーム意味論では、全てを語用論的解釈に推し進めてしまうために具体的な格の供出先を特定できない。従って、(19) における foam の統語的抽象格は、構文知識からと考えざるを得ない。

Goldberg は、個々の動詞が項に対して課す意味指定を参加者役割 (participant role)、構文知識が名詞句に対して課す意味指定を項役割 (argument role) と呼んで区別している。参加者役割は個々の動詞毎の意味の違いに対応する細かい意味情報を持つが、項役割は構文知識に根ざしているため、より一般的であり細かい意味情報は指定されていない。(19) において、Pat は動詞 sneeze から項を得

ているので参加者役割、foam 及び cappuccino は構文知識使役移動構文から項を得ているので項役割と規定できる。(21) は、(19) の構文文法である。

(21) Caused-Motion Construction

Sem	CAUSE-MOVE	<cause	goal	theme>
R: means,	PRED	<		>
Syn	V	SUBJ	OBL	OBJ

Goldberg (1995: 52 一部改)

構文理論では、基底構造の上に構文知識が成り立っていることを前提とした上で、項の不一致を構文知識によって解決している¹²。

3.2 使役移動構文の概念意味論的表示

前節では、一項動詞とみなされる動詞 sneeze でも経路表現においては三項現れうる（即ち三項動詞になり、二項しか与え得ない (20) は非文になる）現象を観察した。Goldberg (1995) は構文知識から項の不一致を説明するが、本節では影山 (1996) の概念構造から項の不一致を説明する。以下の例文を検討する。

(22) The general marched the soldiers to the tent.

Levin & Rappaport (1995: 111)

(22) も本来一項動詞であるはずの march が二項を伴い使役的表現として具現化する例であるが、このように経路表現を伴わずとも一項動詞が二項を伴う例が (23) である¹³。

(23) He walks his dog every morning.

影山 (1996: 175)

¹² 松本 (2002) では、構文理論は動詞の意味を軽視しているとの主張から、構文知識に対して慎重な姿勢を示している。

¹³ 影山 (2002: 122) は、(23) を「語彙概念構造における項構造のすりかえ」として説明し、統語構造と語彙概念構造のインターフェイスに項構造があると主張する。影山 (1996: 133) も参照。

これら一項動詞が二項ないしは三項を与える動詞の意味構造は、以下のように表されうる¹⁴。

(24) V : [_{xi} ACT] CONTROL [_{xi} MOVE [Path]]

V

影山 (1996 : 174 一部改)

(19)、(22) 及び (23) で共通するのは使役の意味の存在であり、影山 (1996) では CONTROL という新たな基本的意味成分を導入して使役移動構文を説明している。従って、(24) は (21) における Goldberg の構文文法を概念意味論で表したものだといえよう。(21) と (24) の違いは以下のとおりである。

<1> 前者が一般的使役移動構文を表しているのに対し、後者は自動詞における他動詞的用法に限定した使役移動構文を表していること。

<2> 前者は使役の表示に CAUSE を立てているのに対し、後者は使役の表示に意図性のある CONTROL を立てていること。

<3> 前者が項構造における統語的表示をしているのに対し、後者はあくまで概念構造のみを表示していること。

以上、Goldberg (1995) の主張を概念意味論的操作を用いながら簡単に概説した。以下、EN の否定の概念構造に言及する。

3.3 EN の否定における概念構造

EN の否定における概念構造を概観する上で、(16) を例に挙げる。(16) の概念構造は (25) である¹⁵。

(25) [+Tem: EN TU VIDA]_i [HA SIDO EL CASO [POL [TU TRABAJAR]]]
[+NEG trace_i]

¹⁴ 意味構造の表示は Jackendoff (1990) に準拠し、意味分解は BECOME や ACT といった基本的な意味成分に還元されうるのを前提としている。なお、(24) は自動詞の他動詞的用法における概念構造であるが、本稿の趣旨は他動性を議論するものではない。

¹⁵ 概念構造における極性 (POL) の位置は中右 (1994) を参照。

(25) で主題化された EN 前置詞句は、主題化される前の位置に痕跡 (trace) を残す。この痕跡は構文から与えられた項構造の空の項であり、Jackendoff (1990) が述べる統語構造では表出されない暗黙項 (implicit argument) にほぼ相当する¹⁶。(15 ii) の要件を備えている EN 前置詞句が主題化され、その痕跡が空である場合、この痕跡は否定極性を与えうると仮定できよう。しかし、この痕跡の位置に何らかの意味論的因子が入り込んできた場合、痕跡は否定極性としての価値を失い、入り込んできた因子の意味論的性質に従う。(17a) の概念構造である (26) はその典型である。

(26) [+Tem: EN TU VIDA] [HA SIDO EL CASO [POL [TU TRABAJAR]]] [MUCHO]

EN 前置詞句の主題化によって生じた痕跡の否定極性価値は、副詞的意味成分 MUCHO の参入によって消される。結果として否定極性は消え、肯定的解釈しか容認されなくなる (3.4 参照)。

前節 (2.1) において (6) の曖昧性を指摘したが、それは (6) において動詞に後続する名詞句を修飾している前置詞句が、概念構造では二通りの解釈を聞き手に強いるからであろう。(6a) における肯定的解釈の概念構造は (27a)、否定的解釈の概念構造は (27b) である。

(27) a. [+Tem: EN MI VIDA] [HA SIDO EL CASO [POL [YO SER VENDEDOR]]] [DE LIBROS]

b. [+Tem: EN MI VIDA]_i [HA SIDO EL CASO [POL [YO SER VENDEDOR DE LIBROS]]] [+NEG trace_i]

聞き手は統語構造から (27) の両方の概念構造を想定しうる。そして、前置詞句 de libros が動詞を修飾する選択的なものか、名詞を修飾する義務的なものかは瞬時に判断できない。従って、(6a) は否定的解釈も肯定的解釈も容認する。

EN の否定は概念構造で与えられたものであるが、項構造では動詞が意味的に

¹⁶ 本稿では同一指示標識にローマ字を用いたが、Jackendoff (1990 : 62) の項束縛 (argument binding) と同義である。

要求する意味役割を入れるスロットを問題にするため、この痕跡は項構造では扱われえない。否定極性にかかわる EN 前置詞句はあくまで選択的な前置詞句であり、義務的ではないからである¹⁷。

(28) Has trabajado.

(28) は EN 前置詞句がないにもかかわらず容認される。この選択的前置詞句と義務的前置詞句の区別はきわめて重要である。前者は動詞の項構造に直接影響を与えないが、後者は項構造と密接に関連する。動詞 *trabajar* は他動詞的用法も容認する¹⁸。

(29) Has trabajado la madera.

(29) で現れる目的語の *la madera* は動詞の項構造の点から必須のため、概念構造において選択的に現れる EN 前置詞句と本質的な項構造関係はない。

他動詞に伴う言語表現にも EN の否定が現れうるのは (1a) で見たとおりであるが、(1a) における *agarró* は動詞の項構造において目的語が必要であるため、その義務的目的語である *una rata* が EN 前置詞句の主題化によって残された痕跡に入り込むことはない。以上を踏まえると、(1a) の概念構造は (30) になる。

(30) [+ Tem: EN TODA LA TARDE] _i [FUE EL CASO [POL [AGARRAR UNA RATA]]] [+NEG _{trace} _i]

基本的に時間表現を持つ EN 前置詞句は、動詞がその項を要求する性質のものではない。即ち、EN の否定に直接かかわるのは参加者役割ではない。従って、動詞の項構造における議論では (15 i) の必要性を説明できない。

以上の議論から、以下の仮説を立てることができる。

¹⁷ 1.3 節 (15 i) 参照。

¹⁸ Alarcos Llorach (1980) は、多くのスペイン語の動詞は自動詞的にも他動詞的にも用いられると指摘している。

(31) EN の否定における意味論的条件仮説 (Hipótesis de Condiciones Semánticas de la Negación de EN)

- i) 時間の経過を指し示す選択的 EN 前置詞句が主題化された時、意味論的痕跡は否定極性を持ちうる。
- ii) 痕跡には動詞が要求する参加者役割を入れることはできない。
- iii) 痕跡は動詞の項構造とは関係がない。
- iv) 痕跡に選択的前置詞句または副詞が入ると、否定極性は失われる。

ここで重要なのは、EN の否定は動詞の項構造では議論できないが、構文知識における項構造ならば議論できる点である。従って、動詞が要求する参加者役割が痕跡に入ることができないという (31 ii) は、(31 iii) から必然的に導き出される条件である。次節では、参加者役割ではなく項役割の観点から説明を与うる可能性を模索する。

3.4 構文知識における EN の否定

以上を踏まえた上で、(31 i) 及び (31 iv) を構文知識を用いて検討する。なお、(31 ii) 及び (31 iii) は、動詞から与えられる参加者役割ではなく構文知識から与えられる項役割に焦点を絞っているという点で、以下の説明の前提となっている。

構文文法を扱う上で重要なのは、①複合表現の意味は、それを表現する記号表現の意味の総和であるとする構成性の原理 (Principle of Compositionality)¹⁹が当てはまらない場合に適用される²⁰、②中心的構文から周辺の構文が成立されなければならない、という点であろう。①は「全体は部分の総和以上のものである」とするゲシュタルト的な汎用性²¹、②は構文知識を安易に解決不可能な構文の説明材料にしないための抑制をそれぞれ含意する。

¹⁹ 辻 (2002) は「合成性の原理」という訳語を与えているが意味は同じである。

²⁰ 田林 (2005) は単一表現でも外延 (connotation) により総和以上の意味が表れると主張する。

²¹ Levin & Rapoport (1988 : 282) は語彙的従属化 (Lexical Subordination) を使って、ある動詞の基本的意味に新たな述語を従属化させることで構成性の原理を保とうとしている。これは Jespersen (1928 : 232-234) を基盤とした伝統的な考え方であるが、生成語彙論 (3.1 節参照) と同様、動詞に付加される情報が多すぎるという欠点を持つ。太田 (1980) も有限規則の循環適用という観点からこの姿勢を崩していない。

EN の否定の構文知識は SN V SP を基盤とし、(32) のように表される。

(32) Composite structure: Negation of EN

Sem	location ²²		<agent	<u>+NEG</u> >
R: means,		PRED		
Syn	+Tem LOC _i ²³	V	SUBJ	trace _i

下線で示した場所が EN の否定構文がもたらす構文的意味であり、太字は構文知識によってプロファイルされた要素である。否定極性は語の意味の総和に還元されないので、構文から与えられた意味と考えるのが妥当である。

更に、もともと選択的な EN 前置詞句は EN の否定を表す際は義務的に出現しなければならない。従って、EN の否定における EN 前置詞句は動詞の項構造ではなく構文の項構造で語られる項役割であり、構文によって EN 前置詞句はプロファイルされる。以下、(14b) を (32) のプロトタイプを使って表す。

(33) Composite structure: Negation of EN

Sem	location		<agent	<u>+NEG</u> >
R: means,		TRABAJAR		
Syn	+Tem LOC _i	V	SUBJ	trace _i
	En tu vida	has trabajado	pro	

スペイン語は主語を省略できる pro 言語であるため、統語構造で tú は具現化されない（便宜上 pro と表記する）。

(32) の構文知識はいわば中心的な構文であり、(5a) のように時間表現を伴わず EN の否定に酷似した構文を残すもの、あるいは (8) のように主題化を伴わない周辺的な構文へと、構文間のメタファー的拡張が可能である。従って EN の否定構文は構文のネットワークを形成することができる。

以上、EN の否定を構文知識とみなすために必要な要件①と②が共に成立する

²² 意味役割の定義は大堀（2002）による。意味役割 location は時間的場所というメタファーに関連して生じたものである。

²³ ここでは EN 前置詞句を暫定的に位格とした。格の歴史的研究については山田（2002：560）、共時的研究については Gutiérrez Ordóñez（1999）、Fernández Soriano（1999：1219）他を参照。格の定義については本稿では論じない。

ことから、(31 i) は構文知識として適格と考えられる。

(31 iv) の妥当性は、Goldberg (1995) の一義的経路の制約から説明できる。

(34) 一義的経路の制約 (The Unique Path Constraint)

X が具体物の場合、単文内で X を二つ以上の異なる経路について叙述することは出来ない。即ち、(a) X は特定の時点において二つの別々の位置に移動するようには叙述できない、(b) 移動は単一の情景 (landscape) の中で一つの経路を辿らなければならない。

Goldberg (1995 : 82)

ここで、位置、移動、経路という用語は Jackendoff (1990) と同様に抽象的な状態変化も含む (影山 1996 : 227)。(34) により、以下の表現が非文であることが説明できる。

(35) a. * He wiped the table dry clean.

b. *Shirley sailed into the kitchen into the garden.

(36) *The vegetables went from crunchy into the soup.

Goldberg (1995 : 82-83)

(35b) は二つの別々の位置の移動を示すため (34a) の物理的移動に違反し、(35a) は二つの別々の状態変化を示すため (34a) の状態変化に違反するため非文となる。そして (36) は (34b) の単一の情景の違反、即ち抽象的移動と物理的移動を単文内で表現しているため非文となる。

EN の否定における (31 iv) の仮定に重要なのは (34b) である。即ち、極性因子と副詞ないしは前置詞句は同一の情景ではない。従って、極性因子と副詞ないしは前置詞句は一つの叙述で二つ同時に共起することが出来ないため、(9) を基盤とした以下のような概念構造は非文となる。

(37) * [+Tem: EN TU VIDA] ; [HA SIDO EL CASO [POL [TU TRABAJAR]]]
[+NEG trace_i] [MUCHO]

上記の概念構造を一義的経路の制約に基づいて容認可能にするためには、二つ

の経路のうちいずれかを削除する必要がある。統語的に顕在化された MUCHO は顕在化されていない否定極性より意味的に影響力があるため、前者が残り、後者は消滅する²⁴。

以上の議論から、(31) で示した仮定が構文知識では妥当に機能すると思われる。

4. 結語

本稿では EN の否定が Goldberg (1995) の構文知識によってある程度解決されることをみた。本稿の意義として、①EN の否定における統語的条件を立てたこと (2.1 節 (15))、②それに伴い、EN の否定における概念構造に制約を立てる提案をしたこと (3.3 節 (31))、③意味論的条件の (31 i) の妥当性を構文知識によって、(31 iv) の妥当性を一義的経路の制約によって説明付けたこと、と要約される。

5. 今後の課題

検討すべき今後の課題として、①EN の否定における格のあり方を明確にすること、②EN の否定における構文間のネットワークを詳細に分析すること、③構文の項構造によって与えられる意味役割を明らかにすること、等が挙げられよう。特に意味役割と項構造は密接な関係を持つため、意味役割を枠外に置きながら項構造を議論することは非常に危険を孕む²⁵。今後は意味役割を絡めた EN の否定における項構造の研究が急務である。

²⁴ 痕跡の消滅の議論に関しては太田 (1980 : 68) も参照。

²⁵ しかし、現状では、意味役割の定義や基本的な意味役割がいくつ必要かといった根本的な点が曖昧なまま議論されている。

参考文献

- Alarcos Llorach, E (1980) *Estudios de gramática funcional del español*, 3^a ed., Gredos.
- 安藤貞雄編 (1993) 『生成文法用語辞典』大修館書店。
- Benveniste, E (1966) *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris: un Problème de linguistique générale*. Gallimard.
- Bosque, I (1980) *Sobre la negación*. CATEDRA.
- Bosque, I & Violeta, D (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española*. 3 vol. ESPASA.
- Chomsky, N (1981) *Lectures on Government and Binding*, Mouton De Gruyter.
- Dubois, J et al (1973) *Dictionnaire de linguistique*. Librairie Larousse.
- Fernández Soriano, O (1999) *El pronombre personal. Formas y distribuciones. Pronombres átonos*. *Gramática descriptiva de la lengua española*. 1 vol. 1209-1273. ESPASA.
- Fillmore, C (1968) *The Case for Case*. In Bach, E and R. T. Harms (eds), *Universals in Linguistic Theory*. Holt.
- _____ (1982) *Frame Semantics*. Hanshin.
- Goldberg, A (1995) *Constructions: a construction grammar approach to argument structure*. University of Chicago Press.
- Grimshaw, J (1990) *Argument Structure*. MIT Press.
- Gutiérrez Ordóñez, S (1999) *Los dativos*. *Gramática descriptiva de la lengua española*. 2 vol. 1855-1930. ESPASA.
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』大修館書店。
- _____ (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
- Jackendoff, R (1972) *Semantic interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, MIT Press.
- _____ (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MIT Press.
- Jacques de, B (1999) *Las preposiciones*. *Gramática descriptiva de la lengua española*. 1 vol. 657-703. ESPASA.
- Jespersen, O (1928) *A Modern English Grammar III*. George Allen & Unwin Ltd. London & Ejnar Munksgaard.

- 加賀信弘 (1997) 「数量詞と部分否定」『指示と照応と否定』研究社出版。
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論－言語と認知の接点』くろしお出版。
- _____ (2002) 「非対格構造の他動詞」『文法理論：レキシコンと統語』シリーズ言語科学 1. 東京大学出版会。
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社出版。
- Lakoff, G & Johnson, M (1980) *Metaphors We Lived By*. University of Chicago Press.
- Lakoff, G (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. University of Chicago Press.
- Langacker, R (1987) *Foundations of Cognitive Grammar 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- _____ (1991) *Foundations of Cognitive Grammar 2: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Levin, B & Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- Levin, B & Rappoport, T (1988) *Lexical Subordination*. CLS 24.
- 松本曜 (2002) 「使役移動構文における意味的制約」『認知言語学 I : 事象構造』シリーズ言語科学 2. 東京大学出版会。
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店。
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会。
- 太田朗 (1980) 『否定の意味』大修館書店。
- Paricio, F (1985) *Aspecto de la negación*. Universidad de Leon.
- Sanchez Lopez, C (1999) *La negación: Gramática descriptiva de la lengua española*. 2 vol. 2561-2634. ESPASA.
- Tabayashi, Y (2003) *Aplicación de la Semántica Jerárquica y la Teoría de Prototipo en la Preposición EN –Con Especial Atención a la Polaridad de EN*. Universidad de Sofía.
- 田林洋一 (2003) 『瞬間プロトタイプ命題理論』Sofia Linguistica 51. 39-60. 上智大学。
- _____ (2005) 『言語の恣意性と瞬間命題論の接点について』原稿。清泉女子大学。
- _____ (2006) 『構文理論による連辞 be の項構造の試案』原稿。清泉女子大学。

- Talmy, L (2000) *Toward a Cognitive Semantics*. MIT Press.
- 田中伸一編 (2000) 『入門生成言語理論』 ひつじ書房。
- Taylor, J (1989) *Linguistic Categorization-Prototypes in Linguistic Theory*.
Oxford University Press.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社出版。
- Ungerer, F & Schmid, H (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*.
Longman.
- Vendler, Z (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.
- 山田善郎監修 (1995) 『中級スペイン文法』 白水社。

Resumen

Consideración sobre la estructura conceptual de la negación de EN Yoichi Tabayashi

En este trabajo intentamos analizar la estructura conceptual de la negación de *EN* según el método de la *Gramática de Construcción* por Goldberg (1995). Definimos la negación de EN como en las expresiones siguientes.

(1) *En* toda la tarde agarró una rata.

En tu vida has trabajado, Pedro.

Aunque no aparece la palabra negativa en (1), estas frases indican la negación por el elemento de EN. En este artículo primeramente aclaramos las *condiciones sintácticas* de la negación de EN sin aparecer palabras negativas. En segundo lugar, en la perspectiva semántica, considerando las condiciones sintácticas suponemos las semánticas de la negación de EN. Finalmente formulamos la estructura argumental de la negación de EN y analizamos el prototipo de la negación de EN como sigue.

(2) Composite structure: Negation of EN

Sem	location		<agent	<u>+NEG</u>	>
R: means,		PRED			
Syn	+Tem LOC_i	V	SUBJ	trace_i	

Como en las futuras investigaciones, estudiaremos la identificación de los casos y el papel semántico de la negación de EN.